

第 26 回日本薬物動態学会年会(広島)時に開催された各種委員会報告について

第 26 回日本薬物動態学会年会時に、各種委員会が開催されました。各委員会の開催日は以下の通りです。

- 11 月 16 日(水): 総務委員会、DMPK 活性化委員会、学会活動活性化委員会、
フォーラム委員会
11 月 17 日(木): DMPK 編集委員会
11 月 18 日(金): 国際対応委員会、NL 編集委員会

各委員会で議論された内容を、議事録として以下に掲載します。各委員会はそれぞれの使命を持ちますが、相互に関連する事項や全体で議論すべき事項も多く含まれています。広く会員の皆様にご覧いただき、ご意見等ございましたら、学会事務局までご一報いただければ幸いです。今後とも、日本薬物動態学会の活動にご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。

第 11 期総務委員長 高野幹久

■Forum 委員会議事録

日 時:2011 年 11 月 16 日(水)12:30~13:30

場 所:広島国際会議場 会議運営事務室⑥

出席者:池田 敏彦、泉 高司、大野 泰雄、川合 良成(次期委員長)、久米 俊行、松永 民秀、永田 清、山田 英之、吉村 義信(敬称略)

フォーラム2012は、「核酸医薬の動態試験:現状、審査、並びに将来展望」(仮題)をテーマとして開催する計画が承認された。具体的な構成については、委員と所属評議員へのアンケート調査を実施することとなった。フォーラム2013のテーマについても意見を交換し、下記の候補案が挙げられた(序列に意味は無く、また挙げられた候補の中から選定すると決定された訳でもない)。

- 1) ナノパーティクルの体内動態・毒性;
- 2) 薬物間相互作用とレギュラトリーサイエンス;
- 3) 小児・妊婦の薬物動態;
- 4) ファーマコゲノミクス;
- 5) 代謝物の安全性評価;
- 6) First in Humanの実際

■国際対応委員会議事録

日 時:2011 年 11 月 18 日 11:45-12:45

場 所:広島国際会議場 会議運営事務室⑥

出席者:(敬称略)山崎浩史(委員長)、玉井郁巳(副委員長)、大槻純男、小澤正吾、川合良成、千葉康司

継続してきた 5 回分の国際シンポジウムを総括した。その結果、従来形式のシンポ開催では、我々の国際化の狙いが必ずしも十分には発揮されていないとの結論となった。即ち、海外からの年会参加者が増加せず、年会英語化のメリットも十分に生かす状況になく、これまで通りのやり方を見直す必要があると判断された。

そこで、これまでとは違った視点から、真の国際化を目指してじっくりと準備するために、場合によっては 2012 年開催を見送り、2013 年に成果がより期待できる新企画を实践する方針とした。そのため各委員それぞれが旧知の海外研究者と連携したジョイントワークショップ等を計画できるよう、委員個人毎にさらなる工夫を行うこととした。具体的には JSSX メンバーがアジア地域に赴き、現地の関連研究者とともに JSSX の魅力をアピールできるようなワークショップのような催しを企画することなども提案された。

現委員全員の次期国際対応委員の継続就任が確認された。

■学会活動活性化委員会議事録

日時:2011年11月16日(水)12:30~13:30

場所:広島国際会議場 会議運営事務室④

出席者:(敬称略)五十嵐隆、桂 敏也、崔 吉道、齋藤秀之(委員長)、設楽悦久、島倉仁、藤田卓也、
布施英一、山田一麻呂

1. 創薬シンポジウムの開催について(H23.11.16)

・日本薬物動態学会創薬シンポジウム~成功確率の高い創薬を目指して~第3回創薬シンポジウム「創薬:新たな挑戦」が成功裡に終了したことが報告された。

2. ベストポスター(BP)賞の選考について

・基礎研究領域、臨床研究領域、創薬研究・開発領域毎にファイナリスト13演題を決定したこと、2次審査結果を踏まえBP賞選考委員会にて受賞演題を決定することが確認された。

3. 医療・育薬関連シンポジウム等の企画検討について

・病院薬剤師、本委員会委員及び所属評議員を対象としたH23年度アンケート調査結果の概要が報告され、次年度年会以降における本学会主導による医療・育薬関連シンポジウム等の企画について意見交換を行った。特に上記アンケート調査結果(本学会の事業活動・シンポジウム企画等に対する要望、提言を含む)、並びに本学会の将来展望・活動構想にかかる理事会での議論や学会長意向等を踏まえた会員向けの情報発信の場となるような学会主導企画について協議が行われた。また、国内外招請研究者とのディスカッション企画としてMTP(Meet The Professor)について意見交換が行われた。

■DMPK 活性化委員会

日時:2011年11月16日 12:30-13:30

場所:広島国際会議場 会議運営事務室⑤

参加者(敬称略):

(委員7名)今井輝子(委員長)、齋藤嘉朗(副委員長)、伊藤清美、荻原琢男、
加藤将夫、中島美紀、丹羽俊朗

(オブザーバー1名)玉井郁巳(DMPK編集委員長)

(編集局)篠原麻里

欠席者(敬称略):渡辺和人

1. 活動内容報告

今井委員長より、現委員による2年間の以下の活動に関する報告および現状確認がなされた。

1) 採択論文の早期公開の開始

本変更に伴う電子投稿システムの改訂およびシステムメールの作成も併せて行った。

2) 投稿規程の大幅な改訂

3) 英文校正についての意見調査および見直し

論文採択後の英文校正の必要性について、Manuscript Central(MC)上でReviewerからEditorへのコメント欄に意見を求めるように変更したが、Reviewerには十分浸透しておらず、徹底のためには周知の必要があるとの意見が加藤委員から出された。

4) Editorial Advisory Board(EAB)の再選

前メンバーより20名が残留することに加え、新たに29名を選定し、2011年から総勢49名(うち日本人36名、海外13名)の体制となった。

5) テーマ号の立案・編集

Vol.26(2011/担当:渡辺委員)、Vol.27(2012/担当:齋藤副委員長)ともNo.1をテーマ号として立案・編集を行った他、Vol.28(2013)は荻原委員が担当することとなった。

2. テーマ号についての検討

1) 2012年テーマ号(Vol.27 No.1)の進捗状況

担当する斎藤副委員長より、例年より多い依頼論文9報およびニュースレターで呼びかけた一般投稿論文2報での構成を予定していること、また各論文の進捗状況が報告された。

2) テーマ号の今後のあり方について

今井委員長より2008年より開始したテーマ号の経緯説明の後、各総説の発行後2年間のダウンロード数の変動(資料)をもとに、IF向上に貢献するという当初の目的は果たしたと考えられることを踏まえた上で、①テーマ号の必要性、②総説の掲載がテーマ号だけになっている現状、③テーマ号として相応しい論文数、等についての検討が行われた。

①、②については、玉井編集委員長より編集委員会の意見としてテーマ号はぜひ継続して欲しいこと、編集委員の推薦により総説の執筆依頼を行い、随時掲載する案が検討されていることが報告された。③は、一般投稿論文の掲載遅延との兼ね合いを考慮すると5報程度が適当との意見があった。

3. 発行コスト削減に向けた取り組みについて

玉井編集委員長より、①発行の奇数月への移行、②コスト削減のためページ数または文字数制限の導入、を検討していることが報告された。とくに②は急務であり、それに伴って予想される投稿規定の改訂について本委員会に協力が要請された。

各委員からは、NoteやSNP Communicationにおけるページ数制限などの投稿規程が守られていない現状、掲載時のページ数は投稿時には不明のため、文字数での制限のほうが検証しやすいこと、査読で追記を求められるケースが多く結果的に規定のページ数を超えてしまうこと、スペースを必要とする図表などは可能な限りSupplementary Materialsにすることを規定に盛り込む等、現状を踏まえた意見交換が行われた。

最後に、文字数制限については編集委員会が決定し、Supplementary Materialsにすべき図表の対象等、投稿規程に関わる部分については活性化委員会が主導となって案を作成し、互いに意見を挙げてすり合わせる方向で、編集委員会への協力が約束された。

4. その他

1) 2012年より事務局および編集局が移転する旨が確認された。

2) 英文校正による修正箇所が、著者にすべては伝えられていないことへの問題提起があり、今後は修正箇所がわかるように著者校を送付することが確認された。

3) 投稿者が修正論文を投稿する際、希望の査読者を再度登録することに対し、MC上での設定変更が可能かを調査することになった。

以上

■NL編集委員会議事録

日時:2011年11月18日(金)11:45~12:45

場所:広島国際会議場 会議運営事務室⑤

出席者:(敬称略)

(委員4名)設楽悦久, 松永民秀, 三宅正晃, 湯浅博昭(委員長)

1. NLの編集計画

紙面構成は現行通りとし、執筆候補等を含めて当面の編集計画を取りまとめた。なお、アドメノートについては、次のテーマを「レギュラトリーサイエンスにおける薬物動態研究の役割」とし、「医薬品開発支援の新技术・ドラッグデリバリー」及び「薬物投与設計の新技术」をその後のテーマ候補として検討することとした。また、実験方法シリーズの再開(随時掲載)、オンラインコレクション化(下記)に合わせた実験方法コンテンツの拡充を検討することとした。

2. 電子媒体との連携

NL 掲載記事の連載シリーズ単位アーカイブ化(オンラインコレクション化)の実現に向け、引き続き取り組む。記事閲覧の利便性向上を図る目的で、連載シリーズ毎にアーカイブ化(アーカイブ web ページの記事リストから記事毎の個別 pdf ヘリンク)するという構想は固まったことを受け、web 委員会と連携し、web ページ設計等の具体化面について検討していくこととした。

3. NL 連載記事の書籍化

オンラインコレクション化により、書籍化ニーズの主要な部分(連載記事の一括提供)には対応できるとみられる。書籍化に際しても電子化対応が望まれるところであり、出版環境の動向、ニーズ等をみながら、対応を検討していくこととした。

■総務委員会議事録

日 時:2011 年 11 月 16 日(水) 12:30 ～ 13:30

場 所:広島国際会議場 会議運営事務室③

出席者:(敬称略)

委員長:高野幹久

副委員長:細谷健一

委員:樫山英二、林 正弘、矢野育子、渡辺善照

オブザーバー:細川正清、永井純也

1)出席者確認(高野委員長)

高野委員長、細谷副委員長、樫山、林および矢野各委員、オブザーバーとして細川(次期総務委員長)および永井(本委員会での書記担当)各評議員の参加のもと、定刻(12:30)通り開始された。なお渡辺委員は、航空便の都合のため、12:40 から出席された。

2)平成 22-23 年活動報告(高野委員長)

高野委員長より、2 年間の活動内容について主な点が報告された。

- ・正会員および学生会員の休会および海外在住届に関する細則

以前は後追いで提出する事例が見られたため、休会届を事前に提出する取り決めを細則に明記した。

- ・製薬企業内での部署移動による休会の可否

「部署移動による休会は認めないこと」が理事会で確認された。部署が変わっても会員として継続いただきたいという理事会の考えであることが紹介された。

- ・Fellow 授与者が退会した場合の取り扱い

「Fellow 授与者は、退会後も Fellow 称号を使用できること」が理事会で確認された。

- ・会員歴 5 年未満の正会員の評議員候補者推薦の取り扱い

会員歴 5 年未満の正会員の評議員候補者推薦においては、「所信表明を提出すること」が決定されたが、学会への貢献が少ない場合の取り扱いなども含め、本委員会で継続して議論することになった。

- ・名誉会員の選考基準について

名誉会員の決定は理事会で行い、総会で報告する形式に変更された。ただし、その選考基準については、今後見直しが必要となる可能性もある。

*「理事会議事録」記載事項についての報告(高野委員長)

以下の理事会議事録に関する内容が報告され、それに伴う問題点が提起された。

《新評議員、新名誉会員予備審査結果について》

総務委員会で新評議員候補者 16 名および新名誉会員候補者 3 名の予備審査を行い、名誉会員候補者 3 名については理事会で承認された。

新評議員名誉会員については、全員一致の信任にはならなかったが、最終的には総務委員会として判断した結果、全員を評議員候補者として理事会に推薦し承認された。

本予備審査過程において、問題とされた点

・会員歴は長くても、年会での発表回数や DMPK への投稿回数が少ないなど、形として現れる学会への貢献度があまり高くないと判断される新評議員候補者が見受けられること。

→ 上記の問題点を踏まえて、総務委員会において以下の案件をについて議論することとした。

「会員歴は長くても、年会での発表回数や DMPK への投稿回数が少ないなど、形として現れる学会への貢献度があまり高くない新評議員候補者」に対する取り扱いについて。

3)「評議員の選考方法・条件等」について、本委員会で出された意見

「新評議員候補者の申請資格として、具体的な学会への貢献度を盛り込んでいくか」について、本委員会で交わされた主な意見を以下に記す。

- ・ 毎年同じ議論していることが相当気になっている。何か具体的な基準はやはり必要ではないか。
- ・ 基準を設けるのであれば、例えば、最低年会発表 5 回以上、論文投稿 3 回以上ぐらいとするのはどうか。
- ・ 企業に所属しているからといっても、それなりの貢献は必要と考える。申請書には、候補者の業績などが記載されているにも関わらず、現時点ではそれを評価する基準がない。
- ・ 基準を設けるにしても、あまり高いレベルを求めるのは難しいのではないか。しかし、何もないというのは問題ではある。
- ・ 発表については年会のみならずワークショップやショートコース、投稿論文ではニュースレターなどの和文も投稿回数に含めるべきであろう。
- ・ 企業の場合、それなりの研究経歴のある方が動態関連部署に異動してくる場合があり、その場合、学会に対して十分な貢献が期待できるものの、会員歴が短いことやこれまでの貢献が少ないケースがあるのは事実である。それゆえ、企業サイドからすれば会員歴や業績に関する例外規定は残しておいて頂きたい。
- ・ 発表 3 回以上、投稿 1 回以上とし、それらを満たさない場合には、所信表明書を提出して頂くというのはいかがでしょうか。

* 本討議事項の総務委員会としての総括:

今回の評議員候補者の推薦の際には、原則として、動態学会に関連する学術集会での発表回数 3 回以上、DMPK 誌(英文および和文の区別なし;ニュースレター含む)投稿回数 1 回以上を必要条件とし、いずれか一方でも満たない場合には、所信表明書を提出して頂くという方向で 12 月の理事会に提出することとする(会員歴については、現行の規定通り)。

* その他、評議員の在り方についてのコメント

全会員数に対する評議員の割合が高くなってきている。今後もそのようか傾向が続くのであるならば、例えば、評議員の年会費を一般会員より高く設定することも考えられる。このような措置によって、学会の財源の確保に幾分でも貢献できると思われる。また、こうした場合、評議員が継続を辞退するケースも出てくると想定されるが、評議員の新陳代謝につながると考えられる。例えば日本薬理学会では、評議員になった場合、学会誌の購入が義務付けられるなど、一般会員の 2 倍近い年会費になっており、またそこまでの差はなくても、1.2 倍程度の差がある学会もあるようである。

4) 今後の総務委員会のあり方について

所属評議員制度が適用される委員会が次期から 3 つに絞られることになったこと、総務委員会は所属評議員制度の対象外の委員会になったことについて高野委員長から説明がなされた。

5) その他(自由討論)

本学会会員数の動向および年会の時期などについて、以下の意見が出された。

- ・ 今後の学会の会員数に、6 年制の影響がどの程度出てくるかについて。私学の場合、この時期では 5, 6 年生は発表が難しい。
- ・ 日本薬学会近畿支部大会では、学部生のセッションを設けるとともに、要旨をなくすなど、発表しやすい形式にしたことで、発表数が増加している。
- ・ 日本薬学会北陸支部大会でも発表数が増加している。その増加の要因としては、全国レベルの学会では発表がためられる内容でも発表しやすいことと、発表会場が比較的近隣であることが関係していると思われる。本学会のように、全国レベルで英語のオーラルとなると、敷居は

高い。

- ・ 年会の時期も、発表を難しくしている。今年の場合であれば、臨床実習の最終週にあたるため、実習発表会や実習先訪問時期と重なってしまっている。
- ・ 企業の場合、会員であることのメリットがあまりないと感じているものが多いと感じる。多くの場合、年会参加費は会社からの支出になるので、参加する際に非会員だとしてもほとんど問題にならない。
- ・ 会員であることのメリットを感じてもらおうような工夫を、学会員専用 Web ページなどを通して今後考えていく必要がある。

最後に、高野委員長から、今年末で今期の総務委員会が終了すること、次期以降も企業、病院およびアカデミアが協力しあって委員会を運営して行って頂きたい旨が述べられ、ほぼ予定終了時刻の 13:30 に閉会した。

■DMPK編集委員会議事録

日 時:2011 年 11 月 17 日(木)7:30AM-10:20AM

場 所:日本薬物動態学会第 26 回年会会場

広島国際会議場 B1F 会議運営事務室⑥

出席者(敬称略):

(委員 10 名)玉井郁巳(委員長)、泉 高司、小澤正吾、加藤将夫、川合良成、出口芳春、橋本征也、細川正清、山田英之、Jin-Ding Huang

(オブザーバー1 名)今井輝子(DMPK 活性化委員長)

(編集局)篠原麻里

欠席者(敬称略):Suk-Jae Chung(DMPK 編集委員)

議事

1. DMPK 誌の現状

玉井委員長より下記の点について報告および確認がなされた。

(1)2012 年より新編集局へ移管

(2)各論文の編集委員の審査担当状況

(3)投稿状況:10 月末現在 126 報が投稿され、全体としては増加傾向にある。内訳では国内投稿が増加、海外投稿が減少した。国内投稿の採択率は高く、海外投稿は低いことから、今後も採択される論文数の増加(=ページ数増)が見込まれる。こうした状況および予算の関係から、ページ数の上限設定を具体化したい意向である。

2. ページ数制限について(担当:細川委員)

論文の分量については、制限を設けることで一致した。その方法について、事前に募った意見および DMD の実例、DMPK 掲載論文の文字数の調査結果を基に検討し、以下のように進めることとなった。

(1) 刷り上りで 8 ページ以内とすることを目標に、まずは次のような大枠で取り組む。

① 制限はトータルの文字数(References を含む、Legends は含まず)とする

② Figs&Tables を最大 8 点とする

また、過去の掲載論文の文字数について再調査を行ない、具体的な文字数案を算出した上で理事会に諮る。

(2) 査読結果により追記が必要な場合、厳格に制限することで論文内容に不具合が生じることを防ぐため、修正段階で多少の増加は可とする。但し図表等のデータ類はできる限り Supplemental material とし、規定の枠を超えそうであれば AE から著者に文字数を考慮するよう伝えるという個別対応でスタートし、問題があれば随時検討する。

(3)投稿規程に関わる下記の内容については、出口委員および活性化委員会の協力により、案を出してもらうこととする。

- ① Supplemental material にすべき図表の区別
- ② References 内で列記する著者数の制限について
- ③ 図表の数や word 数を論文表紙に記載するよう投稿規程に明記する

3. 総説論文の導入について(担当:小澤委員)

- (1) テーマ号については、引き続き活性化委員会主導で企画・立案するよう、前日の活性化委員会において依頼したことが玉井委員長より報告された。
- (2) 定期的な総説論文の掲載は IF の向上にも寄与することから、以下のように決定した。
 - ① 各編集委員による推薦を受け、メール会議での決定を経て候補者に依頼する
 - ② 小澤委員が中心となって取りまとめ、継続的な掲載を目指す
 - ③ 掲載論文は各号1報、多くても2報とする
 - ④ 投稿規程では推薦のみと受け取れるが、執筆希望者は編集委員に連絡するように投稿規程に文言を追加してもよい

なお、本件実行については小澤委員に手順をとりまとめてもらい、また総説担当編集委員として活動してもらうこととした。

4-1. DMPK 三賞について(担当:泉委員)

一昨年より段階的に表彰方法が簡略化されてきたことや近年の選考経緯を踏まえ、各賞について来年より以下の方向性で変更することを理事会に提案することが決定した。

- ・ 最優秀論文賞:賞として継続する(内容詳細は4-2.を参照のこと)
- ・ ベストサイテーション賞:年会時における表賞は廃止。定期的にニュースメール等でサイテーション数上位論文をレポートする。使用ソフトや集計期間、サイテーション数は明記する意向だが、実際にどのような集計の設定が可能かを調査した上で具体案にまとめる。
- ・ ベストダウンロード賞:年会時における表賞は廃止(既に実行)。定期的にニュースメール等でその期間内のダウンロード数上位論文をレポートする(ダウンロード数は明記しない)。

評議委員会や総会での報告内容については、改めて検討する。また理事会への提案に当たり、泉委員が公表頻度や集計期間等の具体案をまとめることとなった。

4-2. 編集委員が選ぶ最優秀論文賞における分野制の導入について(担当:出口委員)

過去5年間の審査対象となる論文数および受賞論文数を基礎系、創薬・開発系、臨床系の区分で調査したところ、基礎系への偏りが顕著であったことから分野制の導入には意義が認められる一方で、審査対象となる論文数がまだ少ない(約 60 報)現状で導入することには疑問が残るとの意見が多く、継続して審議することとなった。

主な討議内容:導入する場合の分野区分(基礎系、創薬・臨床系の2つが適当)

分野の振分け方法(編集側が審査過程で決定すべき)

導入した際の利点および懸念(利点/臨床系の論文投稿を促進する可能性がある、懸念/対象論文が少ない分野での受賞論文の質)

5. 編集委員の任期について(担当:山田委員)

会則により委員の任期は2年で再任も可であるが、安定した編集のためにはある程度の期間携わることが望ましいことから任期の延長を含めた改定案について検討し、以下が了承された。

- ① 任期は2年、再任可:原則2期(4年)継続するものとし、3期(6年)を一応の退任の目安とする(但しいずれも原則であり、例外は認める)。
- ② 委員の交代にあたっては、メンバーが大幅に変わって混乱を来すことがないよう、委員長が配慮して選出する。
- ③ 本議事録に記載することで内規に準じる扱いとする。

6. 編集について(編集局より)

現在、修正版の審査時のみにある「Reject & Resubmission」という評価設定について、修正が不十分であれば Reject とすることとし、この項目は削除することとなった。

7. DMPK 活性化委員会から(今井 DMPK 活性化委員長)

(1)文字数制限等について

編集委員会で内容が決定されれば、投稿規程およびシステムメールへの変更内容の反映については、活性化委員会が対応することが約束された。

(2) 英文校正について

英文校正の必要性の有無について査読者にコメントを求めることになっているが、徹底されていないため、ない場合には AE からコメントするよう促し、必要がなければしない方向で統一したいとの要望が出された。それに対し編集委員会より、英文校正済みの証明付きであっても一定水準に達していないケースもあることから、原則として全論文に英文校正を行ないたいとの意見が出され、了承された。但し、コメントで必要性が指摘されていない論文については文法の間違いやスペルチェック等必要最低限の修正にとどめるよう英文チェッカーに依頼し、著者に修正箇所を示すこととする。

(3)テーマ号について

テーマ号の発行は継続する方向であり、2013 年は荻原活性化委員を中心に臨床系を交えて企画することが検討中であることが報告された。

8. DMPK の編集方針について

DMPK の今後の編集方針について、他学会の状況との比較や業界の傾向を踏まえて議論された。かねてより提案されていた「学会の方針とのすり合わせは必要だが、学会自体が方向性を模索している状況もあり、編集委員会として新しい分野の論文を掲載することで方向性を切り開くことも 1 つの方法である」件については、以下の具体案が出された。

- ① 新しい分野に対応し、かつ掘り起こせるような編集委員を 2 名程度新たに迎える(テーマ号 AE のように分野限定の特任であってもよい)。
- ② 投稿を待つだけでなく、執筆依頼を行なう。
- ③ 新規分野としては、Pharmacoepidemiology (薬剤疫学) および臨床系が考えられる。分野が確定した際は、投稿規程内「Scope of submitted manuscript」に追記する。

9. その他

玉井委員長より、刊行月を 1 ヶ月前倒しにして奇数月にする計画を検討していることが報告された。

以上